

# 『命がけで産んだ子を 命がけで育てる』

## ～たどり着いたのは『食』～

11月25日(土)、福岡市から助産師の内田美智子さんをお招きして、講演会を行いました。

助産師になって30年。新しい命にかかわってきて、宿ることでできない命、生まれることのできない命、生きることができない命がたくさんあると、内田さんは話し始められました。

『臨月になったというのに、動かなくなり、死産に立ち会った時のこと。苦しんで産んでも喜ぶことができない。一晩だけ一緒に過ごしたいとの申し出があった。夜中に様子を見に行くと、動かないわが子にじわっと出てくるお乳を指ですくって、口元にもっていった母親。あまりにも辛すぎる。』

また、無事に生まれても、4歳までに突然死を遂げてしまいうちもいる。歩き出したばかり、やっと言葉を一言、二言言えるようになった可愛い笑顔を振りまいていた我が子を、原因が分からないまま突然失う悲しさ。母親のせいではないのに、ひたすら謝る、自分を責める母親もたくさんいる。

命がけで生まれてきても、命を奪うもの。5歳から9歳までに多いのは、不慮の事故。親が

話に夢中になっていて手を放す、目をはなすなど、親が気をつけていけば起きなかつた事故が後を絶たない。大人の責任で尊い命が失われる。

不幸を目のあたりにしてきた内田さんは、生まれるっていうことはすごいこと、生まれるということとは奇跡である。』と、私たちに強く語りかけられました。

新聞などを見ると、若い命を自ら絶つてしまうという記事が多く見かけます。生まれることが奇跡であり、また、生き続けることも奇跡であることを、周りの大人は『当たり前』にしないことです。内田さんは、『命がけで産んだ我が子を、命がけで子育てしてほしい。』と話されました。

子育てには、体力がいります。子どものための世話で、自分の時間が減ります。若い親さんの中には、自分の時間を犠牲にしたいくないといって、子どもの世話をきちんとしない人もあるといます。『誰であっても、一日は24時間しかない。24時間を何に使うのか』と、内田さんが投げかけられた時、聞いておられた方々は何を思われたでしょうか。『子どもたちとどれくらい

時間を過ごしているかを振り返り、もっと子どもとの時間を大切にしたい。』と、アンケートに書いておられた方が多くありました。

思春期相談士としても内田さんは、多くの問題を抱えた子どもたちと関わってこられました。そして、分かったこと、それは『食』を大切にすることでした。

毎日、食べないと生きていけない。手をかけず買って来たものを食べる毎日では、親の愛が届きません。子どもを思い、温かいものを美味しく食べさせてあげることです。食卓を囲んで会話をしながら、笑顔で一緒に食べる何気ない毎日の幸せが、子どもにとって何より嬉しいことです。大切に育てられていることを実感できるものです。い

ずれ子どもたちは、一人で生きていかなければなりません。『食』を大切に、愛情をいっぱい受けて育った子は、安心して巣立っていきます。『生まれてきてよかった。これからも元気に生きていきたい。』と、思う子どもたちで溢れることが、『産み育ててきてよかった。』と感じる時ではないでしょうか。

・生きていく中で、食べるということがどれだけ基礎となつているかを知り、命がけで産んだ子を、命がけで育てていけるように頑張りたい。

(20代)

・『食育』を基本として、限られた子どもとの時間を大切にしていきたい。

(30代)

・産んだ方も産んでもらった方も、命の大切さを感じれば、将来への絆が続いていく。

(60代)

